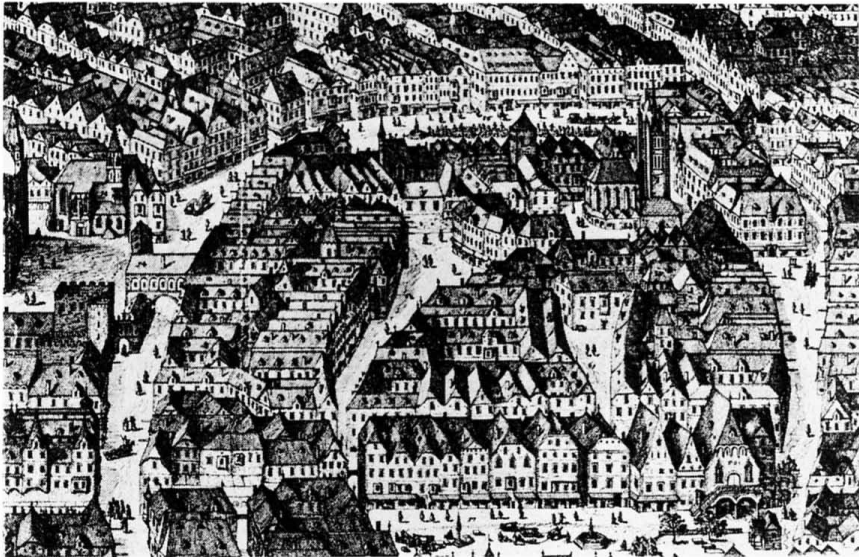


ウィーン

東京理科大学・小布施町まちづくり研究所長

川向正人



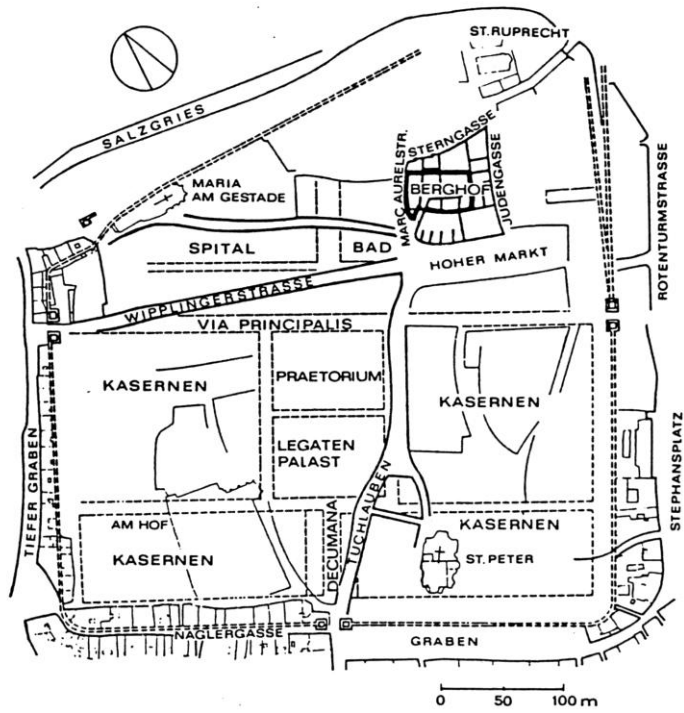
ヤコブ・ヘーファナーゲル（あるいはフリーナール）が描く一六〇九年のウィーン中心部はなお中世的景観を示している。ホーエア・マルクト（前）、グラーベン（後）、ローテントウルマーシュトラーセ（左端）、そしてトゥーハラウベン（右端）が囲む街区が中央に描かれている。左端にシュテファンがごく僅かにみえるが、その前にあって、建物に四周を囲まれた状態のシュテファン広場、あるいは右に移って、トゥーハラウベン沿いに発生していたという三角広場なども確認できる。

ウィーンの現況

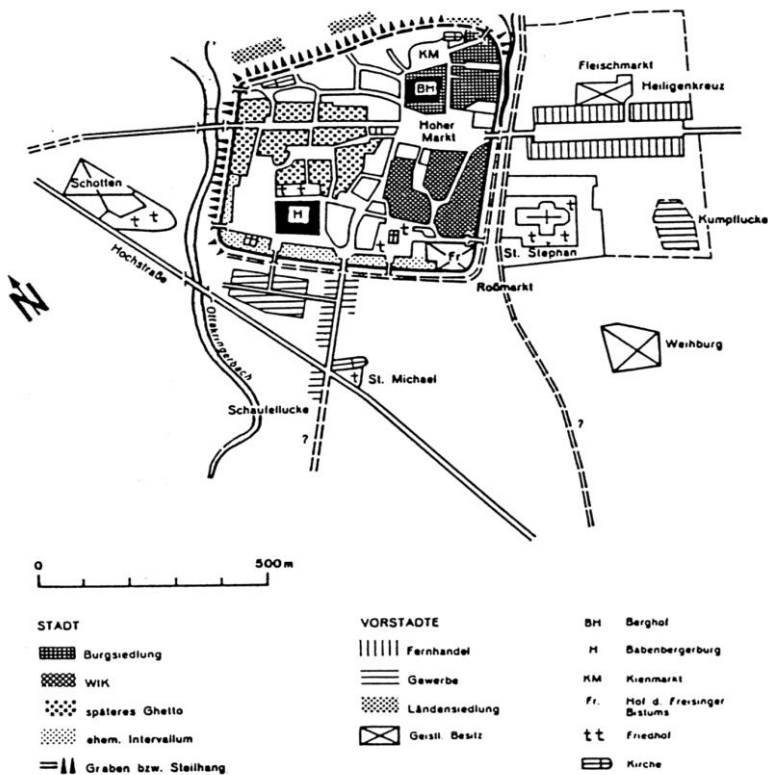
■ 本書の対象となった街と建物など。

- 1. ドナウ運河
- 2. シュテファン大寺院
- 3. 王宮
- 4. リングシュトラーセ（環状道路）
- a. ベルヴェデーレ宮殿
- b. シュヴァルツェンベルク宮殿
- c. カール教会
- d. シェーンブルン宮殿
- e. トラウトソン宮殿
- f. アウアシュベルク宮殿





古代ローマ時代のヴィンドボーナ（ウィーン）は矩形の街区割りがなされていた。ローマ帝国滅亡後、そのローマ城壁内に発達した初期中世のウィーンの街路は、若干のズレを生じている（Ladenbauer-Orelの研究による）。



12世紀の旧城壁内のウィーンとその外に発達した街（市）・教会・修道院（Lichtenbergerの研究による）。